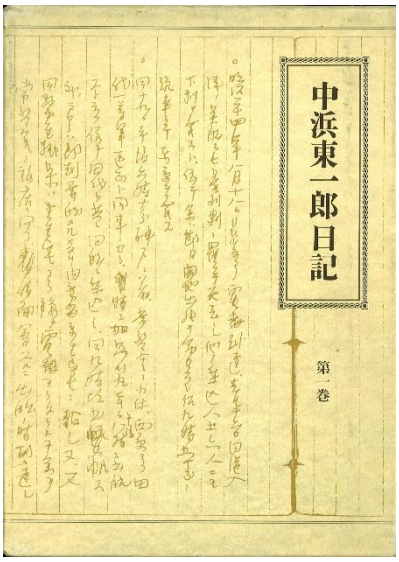
=市史編さん便り=　【３号】令和４年５月２日(月) 発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

『新市史』「第6章以南偉人伝・第3節万次郎年表」の結び部分を加筆

『新市史』執筆で「第６章以南偉人伝・第３節万次郎年表」の結びを昨年書きあげた。そこでは、①万次郎が明治３年(1870)７月 19 日に起こった独仏戦争視察団の一員として選出されて米国を経て、欧州に向かったこと、②その途中でニューヨークに滞在したときに父とも慕う恩人・ホイットフィールド船長と再会したこと、③その翌年、脳梗塞を発症したこと、④この発症した 44 歳以降、プッツリと公的な活動からは退いたことなどを整理して記述した。これでこの節を締めてもまったく問題はなかったが、なんとなく物足りなさを感じた。まだ時間があるので、もう少し万次郎についての考察を深め、まとめあげたいと少々欲がでてきた。人間にとって大切な節目は「生老病死」である。この四つの人間の根本命題は、仏教でも‘四苦’として説かれている。そこを書かずして真の万次郎年表たり得るか…との思いで、万次郎の「臨終」と「葬儀」の様子について付け加えることとした。以下、その概要である。



↑『中浜東一郎日記』

(1)中浜東一郎『中浜東一郎日記』(冨山房、1992 年)を資料として

中浜博『中濱万次郎―「アメリカ」を初めて伝えた日本人―』(冨山書房、2010 年)にその臨終の日の大まかな概要が記されてはいるが、当時をつぶさに伝えるのは何といってもその場面に実際立会い、対応した長男・中浜東一郎である。彼は筆まめで多くの日記を残しており、これらの日記は『中浜東一郎日記』(冨山房、1992 年) として活字にされ、刊行されている。この日記の明治 31 年(1898)11 月 12 日の条に臨終の日の詳細が、16 日の条に葬儀の様子が記されている。これを参考に節をまとめあげ、完結させることにした。

(2)万次郎「臨終の日」明治 31 年(1898)11 月 12 日午後 1 時 40 分

この日は、好天に恵まれた暖かい日であった。万次郎は 71 歳になっていた。早起きの万次郎は、いつものように顔を洗い、口を漱(すす)いだ。その後、新聞を読みながら、茶とパンで朝食を済ませた。当時の東京府東京市京橋区弓町(現在の中央区銀座)

に所在していた万次郎屋敷での家族団らんの光景である。食卓で孫の糸子と新聞の引っ張り合いをしてしばらく戯れていた。隣の居間で、そんな状況を耳にしながら、長男東一郎が茶を飲みながらくつろいでいた。

しばらくすると、万次郎は読み終えた新聞を持って、二階の自分の部屋へ上がっていった。朝食を終えた東一郎も万次郎の部屋の隣にある書斎に入り、自分の書いた医学論文の草稿に目を通していた。女中が万次郎の部屋に入り、一時して万次郎が嘔吐している音が響いてきた。東一郎が万次郎の部屋に急いで入り、女中と一緒に介抱にあたった。そうこうしているうちに容体も一段落したので、東一郎は、気つけ薬として糸子に１階からブランデーを持ってこさせた。万次郎はそれに一口をつけてから１階のトイレに下りていった。容体が落ち着き、東一郎は万次郎の部屋でしばらく先ほどの医学論文の草稿に再び目を通した。その後、午前 11 時くらいに二回目の嘔吐があったが、他に症状も見られなかったことから、東一郎は屋敷を後に東京市の衛生委員会に出席した。当時、東一郎は明治生命株式会社の診査医長の職にあり、この委員会にどうしても出席する必要があった。昼は好物の「芋がゆ」を半椀ほど食し、万次郎は比較的元気な様子だった。

会議を終えた東一郎は、昼食を済ませ、明治生命株式会社に戻った。そこに自宅からの緊急電話が入る。万次郎の容体急変の報。昼食後、しばらくして昏睡状態に入ったとのこと。東一郎はただちに人力車で帰宅した。往診で駆けつけた岡本武次医師がカンフル剤を注射しようとしているときに東一郎は帰宅してきた。既に万次郎の意識はなく、両目は閉じ、呼吸も途絶えていた。人工呼吸を続け、カンフル剤を数度注射したが、午後 1 時 40 分帰らぬ人となった。激動の 71 年の生涯であった。

(3)万次郎の葬儀　明治 31 年 11 月 16 日午後 1 時出棺

万次郎が息を引き取った晩は、近親者のみで通夜。13 日に葬式の準備。16 日に葬儀で午後 1 時より出棺となった。葬儀は鎌倉岸葬儀社に委託し、現在の台東区元浅草に所在していた大乗寺住職が導師、同じく台東区谷中に所在していた仏心寺の 2 名の僧侶が副導師を勤めた。前日の通夜には 60 名、葬儀には約 300 名の会葬者があった。その中には、松岡康毅・林有造ほか、博士等の学者、海軍高官、勅任官等が参列した。

遺体は、仏心寺に土葬された。万次郎は生前にこの寺の墓地に自分の墓石を準備していた。自分の身体の変調や衰えを自分がよく理解しており、自分の死と向い合っていた節がある。

人生は、その終着点として必ず死が存在する。どのように生き、いかに死を迎えるかは、人間にとって、太古からあらゆる哲学・宗教において最重要課題である。脳梗塞になった 40 代から恐らく万次郎は、自分の人生を見つめ、悔いのない生き方を模索していたのではないだろうか。

【編集後記】

激動の時代を精一杯生き抜き、「生と死」を見つめた万次郎。今回の記述の基になった資料は、長男・東一郎の日記である。万次郎が最も頼りとした愛息子の目を通した万次郎の生き方は、これを読む者の心を揺さぶる。万次郎…奥深し！更に深く掘り下げる必要あり。